

ヘビートラップ



島さち子

グ
ブ
ー
ト
ラ
フ
ッ
プ

装画

島
さち子

ベビー・トラップ

1

それが何んなのかわからなかった。何かが、モヤモヤの後ろ髪を引っ張って、しきりに記憶の喚起をうながしていた。でもモヤモヤは、そんなことに、こだわってはいられなかったのだ。

味方ボールのタイトスクラム。縞のジャージーが水平に移動し、ボールが出た。走った。必死のタックル。肩をつかっただけの突破。ボールを持って走っているのは彼？ 追っていく誰か。素早いパス。ボールは彼、今度こそ本当の彼。足があつて、先を走っている。バツキングアップをカットインで眩惑し、振り切つてトライ！ 逆転！ ノーサイド。

観衆のごうつという勝利の叫び。

「あれはわたしの彼です！　そうよ、凄く奴なんです。あの速さ。みました？　あれは、わたしの彼です！」

モヤモヤの言葉を、勝利のどよめきが呑みこんでしまう。

「ね、見ました？　あれはわたしの彼です！」

そばにいた少年が、顎をしゃくってモヤモヤを指さし、自分の頭の上でゆっくりと渦を描いてみせた。握手をし、みんなまじり合い、勝利に抱き合っていた。

それなのに、わたしの脳みそのなか、なにかが潜り込んでモヤモヤを引っ張る。

イケイケのチームが勝って、ついさっきまであんなに夢中だったのに……。モヤモヤは改めて笑顔をつくり直した。

がら空きのスタンド、空き缶や紙屑が散乱している。もう勝利のざわめきは残っていない。

モヤモヤは時間を潰しながら、約束の場所まで歩いた。今ころイケイケは皆から賛辞をうけて、もうスター選手みたいに取り巻かれて、どこかに連れて行かれてしまったのかもしれない。モヤモヤは自分を見詰めた。紺のダウンジャケットにジーンズ、イヤリングもペンダントもつけていない。みずぼらしい、忘れられ易い服装。イケイケはモヤモヤを忘れたのだ。何時間待ったのだろう。ネオンサインが寒さに震えた。

だしぬけにイケイケがモヤモヤの肩を抱いた。そのまま歩いていった。モヤモヤは笑っていた、泣

いたのかもしれない。

どれくらい歩いたのだろう、夢うつつだから、地に足がついていたかどうか。その証拠のように、モヤモヤは時々イケイケの逞しい腕にぶら下がって運ばれたりした。こんなに身もよもなく幸せなのに、それでもなお、何かモヤモヤの邪魔をしていた。それが何なのかわからない。もどかしかった。それは相変わらず脳の内側から引っ張っていた。

何なのか！ 助けを求めてモヤモヤが大きな彼を振り仰ぐと、イケイケの腕に力が入って、息がでないくらい。彼の荒い息の上に、モヤモヤの軽い息が乗っかっている。人がごったかえしているなかを、一心同体になって歩いていった。

「僕の好きな頭！」イケイケはモヤモヤの頭をくしゃくしゃにした。

それなのに、まだわずかな違和感があつて、折角の気分をだいなしにしている。泣き声を聞いたと思つた。周りを見ても誰も泣いていない。泣いているのは記憶の回路のなか。

痩せ細つたアフリカの飢えた子供の大きな目、針みたいに細い手足。白い大きな手の上におかれた小さな小さな黒い手。あつ！モヤモヤは立ち止まった。

思い出したのだ。

赤ちゃん！ まるまる忘れ果てていた。

どうしよう！ 大変！モヤモヤはベビー・シッター。アルバイトを始めたばかり。

「ああ……あ、赤ちゃんが、赤ちゃんが死んでしまう！ わたし、赤ちゃんを忘れて、忘れ果てていたわ！」

もう九時になっていた、帰ると十時になってしまう。イケイケはモヤモヤの顔がこわばり、血がさつと引いていくのを見て、いっしょに蒼ざめていった。モヤモヤはアパートに寄ってぐずぐずしてから、球場に来た、だから、もう三回ミルクの時間をやり過ぎたことになる。

「赤ちゃんが死んでしまう、赤ちゃんが死ぬ！ わたし、赤ちゃんを頼まれていたのよ。眠っていたから、ほんのちよっと、ほんのちよっとねと思って、アパートに携帯電話をとり帰って、ドアに挟んであったイケイケのメモを見つけたの。途端、今日の試合と、イケイケと逢う約束のことで、頭の間が一杯になってしまつて……。赤ちゃんのことをすっかり忘れちゃつて、試合を見に来てしまったの。すっかり忘れていたのよ、忘れ果てていたのよ！」

「どうしてまた……」

イケイケは心細そうな口調でいった。

「赤ちゃんが、飢え死にする、もう駄目かもしれない」

「赤ん坊だからって、そう簡単に飢死しないと、思うけどな？」

イケイケはスポーツマンの素早さでタクシーにモヤモヤを押しこんだ。

「じゃ、モヤモヤ、あとで……。何かあったら、必ず電話してくれるよね。約束だよ！」

イケイケは大きな体を屈めて手を振った。何もかもだいなしにしたのに、彼は怒らなかつた。呆れ果てているのよ。

赤ちゃんを誰かが覗いてくれたら………。父親、管理人、近所の人たち、新聞屋、通行人、誰でもいい、助けておいて欲しい。赤ちゃんがずっと、モヤモヤに警告しつづけていたのに、ラグビーに夢中になって、わたしはそれをわらうとしなかつたのだ。耳のなかで赤ちゃんの泣き声が高くなつた。

2

マンションの入り口にタクシーが横づけになった時、朝と何も変つては見えなかつた。夜霧の中にマンションの輪郭だけが、黒い線になって宙に浮いていた。すれすれの一步で間に合つて、危険が半分退散したような気がした。部屋の前は閉じている。モヤモヤは頭の中で無事の確率をはじいてみた。鍵穴の中でキイが素早く身を合わせた。のろのろとドアから入った。熱い！ 暖房のかけすぎか？

子供部屋のベッドが見えた。

なんだか変な具合だった。寝台の上に赤ちゃんの姿はない。ベッドの下が嫌にごたごたしていた。毛布が下に落ちて、柵が前に降りていて、赤ちゃんがいない！毛布がわずかに膨らんでいた。白い毛布の下から、赤ちゃんは栗色の髪の毛の一分を見せている。落ちてしまったのだ。どきんとした。毛布が赤ちゃんの体を蔽って複雑にからんでいる。寝具ごと落ちたのなら安心だ。これなら瘤の一つも作らないですんだのかもしれない。そう思ったかった。ご丁寧な枕に顔を押つけて眠っている。うまいわねえ！上手に落ちてくれたわね。いい子、いい子。助かったのね、そう思ったかった。抱上げる。柔らかい髪が額を隠している。眠っているから棒みたいにずっしりと重い。

いい子、いい子。違う！腕が震えた。叫ぼうにも声が出ない。何度もゆすりあげた。揺すられるままに揺れているのは、やはり、死んでいるのだ。

「起きて！起きて！山彦ちゃん！死んだまねなんかしないで！起きて頂戴！お姉ちゃんに泣いてみせて！」

手足をさぐってみた。まだ体に温みはある。何時死んだの？可哀想に！しゃぶり過ぎた親指の先が、紙のように薄くなっていた。モヤモヤが殺したのだ。思わず赤ちゃんを床に投げ出してしまふ。どうしたらいいのかわからない。考えようとすると、それを妨害するように頭に靄がかかってくる。モヤモヤはじつと蹲っていた。

赤ちゃんの口の周りにかすかに赤味が残っている。湿疹かも知れない。あんなに可愛らしかったのに、何となく薄黒く、腫れぼったいみたいだ。胸に耳を当てた。耳打ちしてくるのは、モヤモヤの耳の動脈。もう駄目。モヤモヤの喉から黒くしぼんだ音が出ている。可哀想に、お腹をすかして、おむつも替えてもらえず、泣きあかし、寝返りを打って、毛布ごと落ちた。窒息したのだ。わたしが柵を閉じておかなかったのかもしれない。どうしたらいいのか。このままでは殺人罪だわ。忘れるなんて自分が許せない。でもこんなことで警察に掴まる気にはなれない。逃げる？　そう、逃げるしかない。でも、逃げる前に彼に逢いたかった。イケイケに電話をするのだ。もう逢えなくなるのだから、彼の前で繕う必要なんてもうない。こうなっては、もはや、ないのだ。

イケイケの携帯に、虹児くん、発信。次の合宿に入るまで時間があるのも、大目に見てくれるだろうと。彼が間髪をいれず出たのは、待機していたのかもしれない。

「駄目！ やっぱり、死、死んでいたわ」

「死んだ！」

向こうでイケイケが絶句している。長い沈黙のあと、

「僕、これから行くよ！　早まるな！　いいか、すぐいくから……」

イケイケは、わたしに死ぬなといったのだ。その言葉に驚いてしまう。彼が電話を切ってから、わたしは耳に携帯電話を押し当てたままだった。そのほかになにが出来るの？

あの日、モヤモヤは通訳をしている、林和歌という見知らぬ女から電話を受け取った。

「落山モモさん、あなた、西行先生にアルバイトの斡旋をご依頼されたそうですけど。実は、私、暫らくの間、国際会議に通訳として出席いたしますため、外国に出張しなければなりません。そこで、生後三カ月の男の子のベビーシッターを、お引き受け願えないかと思ひまして……。丈夫でよく眠る、手のかからない子供ですの。あなたは、将来児童福祉関係のお仕事を目ざしておいでとか……」

二週間で二十万円のアルバイト口が、突然転がり込んできたのだ。わたしは興奮のあまり、眠れないくらいだった。早速、面接をかねて自宅に行ってみると、林和歌は誠実でおだやかな感じの女で、やや低い声を出した。

「わたしの坊やなのに、ろくに顔を見ることもないんですよ。お若いあなたに育児を押しつけるなんて、すまない気も致しますけど……。夫は不動産業で、最近出来たマンションに一足先に住んでいます。だけど、山彦をあなたに見ていただくために、ここは前のままにしておきました。どうぞこちらでお暮らしてくださいな」

わかった、住み込みだから高給なんだ。

「預かってくれていたお婆さんが急に脳梗塞で倒れましたの。それで健康な若い方を捜していたんですよ。老婆の子守りは嫌ですわ。うっかりすると、しなびた乳房を含ませたりするんですもの。友人

など、アメリカで高校生のベビーシッターを頼んだんですけど、若ければ若いほど、ベビーの気持ちが良い分かるらしいって、言っていましたのよ」と……。

モヤモヤはゆっくり顔をあげた。坊やが死んでいるなんて信じたくない。人間の壊れやすさ、死ぬということがどんなことか、知らないわけではなかったのだ。

イケイケは筋肉質の体をたわめて、赤ちゃんを左右に揺り動かしている。

「まだ、暖かいぞ！ 馬鹿だなあ、まだ、生きているじゃないか！」

彼はけたけた笑った。

「ほんとう？ ああ、暖かい！ 動いた！」

二人で山彦の胸を押し、手足を叩いた。何分、何十分、そうしていただろう。二人で一緒に触るから、山彦は生きてるように動いた。本当に生きているみたいに、唇まで動いていた。

「もうだめ！」

「駄目か！」

暖房が効きすぎていて、死体を暖めているのかも知れない。こんなに小さくて長い長い人生の出発点にいた命が、死と結びついてたなんて信じられない。モヤモヤは眠っている赤ちゃんにするように、もう一度、そうっと揺すってみた。山彦はモツアルトが好き。子守り唄をうたうと、モヤモヤの濡れた睫毛の間に幾つもの虹が見えた。

彼はベッドの柵、壁やサイドボードの上に、掌を這わせていた。何もかも熱を持っていた。

「冷暖房は中央制御か？　こんなに暖房をきかせていたら、腐敗してしまう。早くなんとかしよう！」
イケイケがいった。

「時間がない？　警察に？」

モヤモヤは顔を蔽って後退りをした。恐ろしかった、ただただ恐ろしかった。怯えていた。

「どうする、どっちにしても、親が帰ってくればわかってしまう……。それが嫌なら、埋めるか！　捨てるか！」

モヤモヤは必死で首を横に振った。すぐにばれてしまう。

「じゃあ、替わりを探すか？」

イケイケがいった。

誰だって大きな間違いを犯すものなんだ。危ないところをどう切り抜けるかによって、一生がきまってくる。ここでヘマをすることは許されない。どうすることが正しいかではなくて。どうするかということだけだ。たぶん、そう。

「替わりといっても……」

イケイケの目が動き回っている。

「顔が似て、同じくらいの大きさの子なら、僕なら親に抱っこされているのを、タツクルして走るこ

とも出来るけど……、まさかな……。それより、まず、死体をどうする？」

誰にもさとられない方法は？ モヤモヤは立ち上がっていた。その気になればわたしだって動ける。時計は十二時を指していた。この時、天意のようにひらめいたのだ。

どんな回路を通って記憶が喚起されたのか。

「乳児院！」

モヤモヤは言っていた。イケイケの目がぱっと大きくなった。

「わたし知ってるの。高校生の時、ボランテアで行ったことがある。捨て子や、育てられない子供を預かっておくところよ」

「文句をいう親もないってわけか？ 大勢いるから似たのを選ぶ？」

「福祉関係は人員不足だろうから、いちいち赤ちゃんの顔を覚えていないかもしれないわ。ボランテアで行った時、わたし間違えて、同じ子に二人分のミルクを与えてしまい、一人にはなにも与えなかったのよ。そういえばあの頃から、わたしという人、おかしかったのかもね。モヤモヤと呼ばれる理由がわかったわ。ああ、そんなことどうでもよかつたんだ。今頃の時間なら、夜勤の人が一人いるだけよ。いても他にもう一人。大抵は年配だから、うたたねしていると思うわ。病院と違って死と隣り合わせじゃないもの」

「きまった、それで行く！」

体育会系のイケイケは常に前向きで、迷わない、ぶれない。

モヤモヤは赤ちゃんを裸にして綺麗なバスタオルで包んだ。

「ご免ね、こんなむごいことをして！」

イケイケがラグビークラブの、ボストンバッグをさし出していった。

3

防風林に続く、雑木林のそばで車を止めた。驚いたことに古風な木造二階建だった乳児院は、すっかり白い近代建築に変貌していた。

モヤモヤは水に飛び込む前のように深く息を吸い込み、林山彦を入れた大きなバッグを胸迄持ち上げた。

「大丈夫だよ、いくら様変わりしていても実態はそう変ってはいないものさ。非常口を狙おう。乳児院にとって、怖いのは火事だけだろうから、幾つかあるさ。ほら、赤い小さな灯、あの階段。二階へ直接行けるよ。あそこから入ろう」

イケイケが指さす方向に、庭から二階に通じる白い階段が薄っすらと見えた。照明が明るいのは二階と一階の中央部。イケイケは両眼を光らせながら、死体の入ったバッグを両手でキャッチした。

発熱でもしているのか体全体が重い。彼は時々立ち止まっては周囲に注意を払う。二階で赤ちゃんの泣き声がした。イケイケはもう階段に足をかけていた。一段一段上がる。後ろから見る。それが後姿だから、本当に彼だと信じきれない孤独感。イケイケは首を横に振った。駄目なの？ 非常ドアは中からしか開けられないのだ。イケイケはバッグをモヤモヤに押し付けて姿を消した。暫らくすると、どこから入ったのか、内側から非常口が開いた。ドアが閉じるとき、バッグのなかの赤ちゃんにぶつからないように、イケイケは体をしなわせてバランスをとった。

モヤモヤの心臓のうつ音。心臓なんて止まって欲しい。ドカッ、ドカッ、ドドカッ、ドドカッ、ドドカッ、ドドカッ。こんな恐ろしい響きは聞いたことがない。ここは廊下で、モヤモヤは無防備に黄色い光にさらされている。壁に沿って動き、ドアをそっと開けた。

真夜中だから室内の照明は落とされ薄暗くなっているのか、フロアの中央部分が宝石のように輝いて、その光が各室に複雑に反射していた。フロアはガラスで区切られ、中央の部屋から一目で監視できるところになっていて、白衣を着た保母か看護師が一人、向こうを向きに立っているのが見えた。滑らかな白に影が青色に染ったベッドの列。

どこかでドスンというような落下音。モヤモヤは素早く手前のベッドの下にかがみ込んだ。イケイケ

かもしれない。白衣の女は周囲に視線を走らせてから、慌しくでていった。

今だ。この部屋の子供達は大きく、一歳近くにはなっているのだろう。遊戯室が続いている。とすると、逆の方向、中央に近い方向に小さな乳児がいるに違いない。身を屈し、左回りにドアを押していく。ここ？ 嫌、もう少し小さな……。ベッドの背にナンバーと生年月日、名前、その他の記入されたカードがついていた。

生きている山彦がいる。眠っていないのがいて、小さな手で耳を引っ張って、引っ掻いてから、あくびをした。三カ月の子供は三人。カードが、ピンクなのは女の子なのだろう。男の子はいない。駄目か？ そんなにうまくいく筈がないのよ。四カ月の子供は大道天児。男の子だ。顔が山彦に似ているような気がした。

急ぎ足で白衣の女が戻って来る、何かを持ってまた出て行った。モヤモヤが身を低くしている傍らのベッドがきしんだ。見回すと部屋の隅に下着やおむつ、と上着の着替えの入った籠が見えた。その中から一組を取って、そうつと廊下にでた。白衣の女が体温計を振り回しながら帰ってくるのと入れ替わりだ。

壁に沿って歩こうとすると、壁が動いた。壁が柔らかい。ぎくつとする、モヤモヤが壁のなか？ イケイケがシーツを翼のように広げて壁に張り付いていた。

ドアがカチツと音をたてた。処置室とあった。消毒薬の臭い。山彦をポストンバッグから出して包

んであるバスタオルをとった。裸。可哀想に冷めたかった。かすかにミルクの匂い。小さいのに重くて、どっしりした死重。背筋を冷や汗が流れる。着せようとするや反抗する死体。死後硬直、下着をつけるのに手間取った。乳児院のしるしなのか、小さな緑色の双葉がついていた。死体、それはもう一つの形に固まったもの。山彦だなどとはとてもいえない。生物ではない物質に組み込まれた硬いものだ。

身につけた木綿類は柔らかいのに、洗濯ばさみで吊るされていた時の形そのままを主張して、冷たい山彦の体になじもうとしない。これでは着たというものじゃないけれど……。

「あの女はかなりなお婆さんだよ。後は僕が向こうで時間を稼いでいるから、その間に、いいね！」隅で消毒用のアルコールの匂いをさせていたイケイケが出て行くと、廊下が真っ暗になった。彼がスイッチを切ったらしい、モヤモヤは息を止めて待った。

廊下の向こうで突然火の玉が尾を引いて動いた。ひゅひゅーん！ ひゅーん！ 白いふわふわした幽霊みたいなものも上下に動いていた。ばったん！ 白衣の女が飛び出した。廊下を見渡してから、白いふわふわに向かつて突進した。

モヤモヤは素早く乳児室に入り、大道天児を抱え込んでバッグに入れ、バッグのファスナーを半分だけ締めた。生年月日が半月ほど早い。急いで山彦をベッドに腹這いにし、毛布を顔にからませた。早く！ 忘れ物は？ バスタオルのあるのを確めた。

「誰？ 誰です？ そんな悪戯をして！ 分かっているのよ。出ていらつしやい！」

階段のあたりで、白衣の女の叱声がした。

危ないなあ。こんなところに勤めるような女は幽霊なんか信じるわけがないのに……。イケイケは一階にいるのだろうか？

「ギヤーツ」白衣の女が肝をつぶした？ あたりは以前よりしんとしている。次に何が起るか、予測もできない。この荷物を抱いて急がなければ……。非常口のドアを押して外にでた、足ががくがくしている。一步ごとに膝が全屈し尻が地面を這ってから、全力をあげて立ち上った。突然、火がついたような赤ちゃんの泣き声。ああ、駄目！ でも落ち着いてみると、バッグのなかの赤ちゃんの口は哺乳瓶でふさがれていた。育児室のなかの乳児が泣き出したのだ。泣き声は伝染し、コーラスのように乳児院全体に拡がっていった。

モヤモヤはバッグを抱いて雑木林のなかを走った。息を止め、胸を硬くして走りまくる。車の見えるところまできて足を止めると、抱えている赤ちゃんの、喉をすぎるミルクの音が大きくなった。バッグから半身を出してやると哺乳瓶を放して、唇を吸い込んだ。似ているだろうか？ 暗いけれど、眉、目、耳が二つずつ、鼻、口が一つ。半月違うだけでも、随分しっかりしている気がした。

彼はまだ戻らない。三月だというのに、この寒さ！ 本当に肌寒いものがまわりから迫っていた。前の暗闇からよろけるように近づいてくるもの。走ったり、引き返したりすると怪しまれる。と、い

きなり、浮浪者らしい酔っ払いが。喚きながら、モヤモヤの肩を掴んだ。恐ろしかった。爪先で歩くように蔭づたいに姿を隠してきたつもりなのに……。わたしは独りではないのよ。モヤモヤは子供を抱えなおした。

「なんだ子連れか？」

厚いぼろのコートの前をはだけた男は鈍い眼を上げた。モヤモヤは後ろに体をづらし、またも絡んでくる邪魔者を足で蹴った。男はたったの一蹴りで地べたに転がってしまう。モヤモヤは弱いものに力を振るう気なんてこれっぽっちもないのに、次々力を振るっているようで、そのことが気になる。モヤモヤは今朝まで弱いものの代表だった。それなのに今、腕にはこの見ず知らずの子供……。動悸が又もモヤモヤを捕らえる。

浮浪者の男は再び立ち上がり、モヤモヤに向き直った。白いふわふわしたものが横や縦に揺れ動いたすえ、男のまえに立ちはだかる。左、右、パンチの腕が伸びた。ううっ！ 男は樹に抱きつき、くしゃくしゃになってへたり込んだ。酔っ払っているのだ。イケイケは白いシーツを脱いで、男の体に巻きつけ、両手に松明みたいなものを握らせた。

「悪く思うなよ」

真夜中の冷たい大気の中、白く浮かんで見える亡霊を残して車は発進した。

「あいつ、今夜は白い布を被ったまま眠りそうだな、凍死を防ぐには正解だと思おうよ」

後ろから続いてくる車が一台あったが、間もなく追い抜いていった。アベックの横顔が見えたよう
な？

走りつづける間、幽霊が何人か後ろにふっ飛んでいった。イケイケが笑い出した。

「魂消た、魂消た、驚いた！ 人間は本当に四つ肢だったんだよ！」

「ええっ？」

「ああ、あ、びっくりしたなあ、もう。ほんとにびっくりすると、人間は四つん這いになるって、ほんとだよ。あの女は、ギャツといったと思ったら、まるで人間に化けていた獣みたいに、突然頭をどすんと落とすと、四つん這いになって廊下を駆け出して来たんだ。全く、僕もどぎもを抜かれちゃってえ！ でも、あの女は凄いい、外まで突進して来るんだから。僕がラグビーの選手でなかったら、掴まっていたなあ」

山彦を取り戻してきた。まやかしではなく、奪い取られたものを取り戻したのだ。

神様のエラーを二人で修正してあげたのだから、陽気でいられる。

モヤモヤは坊やを山彦のベッドに寝かしつけようとして、急にひるんだ。妙な気持。

「似てるじゃないか、赤ちゃんなど僕の目には皆同じに見えるよ！」

この坊やは林山彦、呼び名は一つしかない。山彦は一続き。モヤモヤがそれを信じなくて、誰がそれを信じるのだろうか。

イケイケはモヤモヤの腕から坊やを受け取ると、ベッドに寝かせ、柵をしつかりと閉じた。モヤモヤは冷蔵庫からビールを出してテーブルに置いた。林家のものだけれど……。

「調理室の裏口に鍵がかかっているなくて助かったよ。交代のとき、掛け忘れたのかな？」

「盗られるものなど何もないとたかを括っているのよ」

「捨て子を奪っていく、物好きもいないし、何があっても肉親から責められることもないかあ！だから、事実がわかっても、施設としては届け出ることを逡巡し、林山彦は大道天児として葬られるさ。心配するな！」

「乾杯！」

イケイケとモヤモヤは速成の強盗二人組として、息を押え、黄金色のビールを飲み干した。闇が徐々に退いていき、青く瀟過された朝がもうそこまで近づいていた。

眠った。少しばかり、モヤモヤはほんの少しずつ、つぎはぎに眠った。用心して眠る。そんな眠り

がつらい。電話が鳴り響いていた。やり過ぎそうとしているのに電話はしつっこく鳴り続けた。坊やが泣き出した。モヤモヤも泣きたい。

「モモさん、眠っていらつしやったの？ ごめんなさい。どう？ 元気かしら？ あら、泣いてる。うちの坊やかしら？ 変な声、坊や、どうかしました？」

林和歌の声がいぶかしげにささやいた。モヤモヤはショックのため引きつった喉を押えた。

「そこに、主人は行かなかったでしょうね。行っても決して入れては駄目よ！ 女癖が悪いんだから！」

「はい」モヤモヤは漸く一声出した。

「赤ちゃん大きくなりました」続けていた。

「まあ、そうなの、すっかりお願いね」

林夫人はそのまま鳴き声を聞いているようだった。電話を切らないで、アメリカからそつと耳を傾け続ける。モヤモヤの荒々しい心が、多分、伝わっていく。

「大分太ったんです。お腹がすいているんです」

声は震えなかった。モヤモヤは役者？

モヤモヤは殴られたあのように、眼を押えて、赤ちゃんを見ないように後ろ向きに坐っていた。泣き止まない。乳児院ではありつたけの大声で自己主張しなければ、かまってもらえなかったのだ。

モヤモヤは次第に自分の耳を信じ自信をとり戻した。

山彦の声とちつとも変りないじゃない！ 違ったのは電話を通して聞いたせいよ。どんどん食べさせて、肥満児にしてしまえば母親だってわかる筈がないのよ。一回のミルク量をふやした。一日一日体重が増えていった。鼻がやや低い。乳児から幼児に近づいていくにつれて鼻は低く見えるようになる。おでこも出てくるし、あと一週間もすれば相当面変わりをする。

携帯電話が鳴った。

「逃げるか？ いやいよになつたら……」

イケイケが真剣な調子で言った。彼の内部にも恐怖の塊がある。モヤモヤが彼をまきこんでしまったのだ。

「わたしひとりでやったことよ。気にしないで！」

とって、イケイケがいなくてモヤモヤに何ができる？

「その子の本当の名前わかるの？」

「大道天児。察しがつくでしょう。大道に捨てられていた天からの贈り物の天児です」

「そうかあ、僕個人としては山彦より天児の方が好きだな。どうして山彦なんて名前つけるのかな？ 耳を塞いでいなければ、生きていけないよ。親の顔が見たい！」

イケイケにこれ以上心配させたら、試合で怪我をしてしまう。モヤモヤにとって一番大切なのは彼！

「さつき、サイドボードの上の写真を見たんだけど、それって、夫人の方のご両親だよ。写真の裏に真木とかつて書いてあったもの。あんな気のきいたオフクロがいるのに、どうして、きみみたいな、未経験なベビーシッターにまかせて海外にいったのだろう？ ……もしかしたら、赤ちゃんの死を願っていたんじゃないか？ 僕ら、慌てふためいて馬鹿みたかな。なんとか無実を証明できればいいんだけど……」

イケイケは本心では、不注意から赤ちゃんを殺したわたしの過失が許せないのだ。誰だって殺しを許せる筈がないわ。いくら忘れるにしても小鳥や仔犬を飼っていて忘れるのとはわけが違うのだろう。……ということは彼はわたしではないわたしを求めているのね。彼はなんとしてでも、わたしが殺したと信じたくはないのよ。イケイケのた、ラグビーの試合に夢中になった結果だとしても……。

「虹児は試合に熱中して！ 大丈夫だから……」

坊やが寝返りを打って、ベッドの柵に触れて止まった。モヤモヤは柵を何度も上げたり下げたり揺すったりした。

「どうした！ 大丈夫か？」イケイケが電話の向こうで身構えるのがみえた。

こんなことをしていたら、イケイケの選手生命まで、モヤモヤのために棒に振ってしまおう。

死、それはモヤモヤの世界。中流家庭で大事に大事に育てられたイケイケの世界とは無縁のものだ。

十七年前、一家心中の、燃え盛るオレンジ色の炎の中から、もやもやとした二歳の女の子がデイベアを引きずって、ふらふらと現れた時の驚きを、養母から何度聞いたことだろう。まるで天使のようだった。でも……あれはわたしが幸運にも助かったのではなく、わたしがみんなを殺したのではないのか？

今でもライターをつける時に感じる戦慄と、高揚感、あれは、何を？ ともすると、わたしがみんなを殺したような気もする。ガス栓をパチパチと押すのが好きだった。とすると、幼い時から、わたしの自覚していない能力があつて、それが殺しなのでは？

養父のつけた愛称がモヤモヤ、触れたら壊れてしまいそうな、風貌をしているとよくいわれるが、わたしの内部は何時も火の粉を散らし、煙っている火事場だ。だから集中力を欠いてしまう。わたしに煙のような合図を送り続けるものたち。

「忘れればすむのよ、虹二！ モモも忘れられたら忘れる。もう、あなたを巻き込んだりはしない！」
「僕が、モヤモヤに、ずっと、ついていてあげられたらいいんだけど、再来週の試合が残っている、そうもしていられないんだ。いいかい、早まってはいけないよ。困ったことができたら必ず連絡するんだ。わかったね！」

イケイケは心配しているけど、わたしは自然死以外の死を死ぬ気はなかった。

振り仰ぐと、細い月が登りはじめ、金星と木星がいつせいに輝き、土星が山彦の魂のようにか弱く瞬いた。また朝が近い。

5

暇つぶしに、ボールペンで髪の毛のなかにホクロをかいた。たしか山彦にはこの位、一糰くらいの丸。ひよめきの上で力が入らなかったが、以前からあったみたいにとれなくなった。

ミルクとベビーフードしかなくなった。でも買物には出られない。坊やが泣いた。モヤモヤは立ち上がり、椅子につまづいた、体力がなくなっている。イケイケのことを想うと、そばにいる坊やを忘れてしまう。また、同じ過ちを繰返しそうだ。イケイケ以外のものに愛を覚えることの難しさ。ラグビーに夢中になっていたのではない。イケイケに夢中になっていたのだ。彼のことしか考えられない。幽霊の彼、どうしてあんなことをおもいつくのだろう！ おかしな人！

まだ、誰もモヤモヤを捕らえに來ない。なんだか変な具合だ。動けば更に変なことが起るに違いない。時には自分より哀れな山彦の魂、小さな命に想いがいつて、モヤモヤは新しく啜り上げる。

言葉の通じない坊やとの時間は長い。電話がなつても出ない、イケイケなら携帯で来る、出ても不愉快なことばかり待っていていそうで怖わかったのだ。

「モヤモヤ！ 僕、僕だよ、イケイケだよ！」

繰返すインターホンの声。彼だ！ ノブを回すと春風が踊り込んで来た。この匂い。嬉しさが込み上げる。

「虹二だったの？」

モヤモヤは唇だけを動かしてから、イケイケになにか秘密でも隠しているように尻込みする。

「なにも食べていないんだろう。馬鹿だなあ、飢え死にしてみようじゃないか。こんなことじゃないかと思っただ」

イケイケは力づけるように激しくモヤモヤの肩を揺さぶる。紙袋の中から大きな手でサンドイッチやおにぎり、野菜ジュースや、果物などをとりだすと、熱い紅茶の缶を目の前に置いた。

モヤモヤの全身をゆるがして喉が鳴り響いた。イケイケの顔が輝く。彼が窓のカーテンを全開にした。それだけで、坊やが入れ替わってからの日付のない日々が吹き飛んでいく。

「僕の調べたところによると、山彦の生まれた病院では、健康な赤ちゃんで何ひとつ障害はなかったそうだ。その点からいくと母親が子供を殺したくなる筈はないよね。でなかったら生まなければよかったですんだし……」

冗談めかしてイケイケは笑った。笑うと切れ長な目が皺を畳み、長い睫毛が蔭をつくる。彼が調査魔だなんて知らなかったな。

「健康で可愛いことくらい分かってる。イケイケは死んだ山彦しか見ていないから、わからないでしょうけど、それは可愛らしかったんだから。もしも障害があったとしても母親が殺すなんて、気が違わなければ、あり得ないことよ」

「御主人の方も調べたいけど、警察の出方がつかめないから、乳児院の誘拐事件のあとがどうなったか、分かってからでないと動けないんだ」

「止めて！ そんなこと調べる人嫌い！ 他人のプライバシーを犯すなんて。イケイケの心まで汚してしまったのかと思うと残念だわ。いずれにしても、わたしが忘れたことが死因なのよ。それだけははっきりしているわ」

こんなことになっては、もう、ふたりに昔みたいに晴ればれとした快さは甦らないのかもしれない。

「きみがなんと言おうと、僕は、僕の信念に従っていく。あとは調べ終わってから報告するよ」

「駄目！ 警察が極秘で捜査をしているわ。危険よ！」

「天児は両親のいない子だって解っているんだよね」

「いや、青い紙がベッドの背に貼ってあって、両親の名も住所も空欄だっただけ。真実はわからないわ」

モヤモヤがはにかんだ笑いを浮かべる。この坊やはわたしみたいな気がする。なのに、坊やに対する同情は、モヤモヤの心配ごとそのものではない、後ろめたさ。

「誰かが来る！」二人は棒立ちになった。嗅ぎつけてとうとう刑事が来た。遂に来るべき時が来たのだ。いきなり、錠がカチ、カチン。二つの音が二度してドアが開いた。まだドアチェーンが残っている。イケイケに目配せをして押しだしたあと、モヤモヤは一人のように動いた。舌が喉を塞いでいた。

「林です、入れてくれませんか。林海彦です。誰かいるんでしょう！ ちよつと、物を取りにきました。です。参ったなあ、僕の家なのに……」

男の声だ。山彦の父親？ でも、林和歌は主人をなかに入れないようにと言った。

「御主人ですか？ それなら、奥様から、なかに絶対に入れないようにといわれています」

イケイケはどこかに身を隠した。モヤモヤは一人で壁に寄りかかるところで立っていた。見ると、ドアチェーンの間から、顔の輪郭だけが青く浮びあがっている。

「誰？ 誰かいるの？」男がいった。

モヤモヤは飛び上がった。玄関にイケイケのスニーカーが脱ぎ捨てたままになっていた。素早く下駄箱の奥に突っ込んだ。

男はドアを力一杯開けようとしている。鎖を切るつもりなんだわ。刑事でないということだけで、ほっとし、たじろぎながらも、強いて男の視線を顔で受け止めた。

「露山モモです。ベビーシッターのアルバイトをしています」

男は不意打ちにあつたように、顔をモヤモヤに向けた。

「チェーンをはずしなさい。ベビーシッターか？　そうか？　お義母さんだとばかり思っていたのに……。そうか、間抜けな話だな。いいえ、ただ、山彦が何か、気になりましたね」

やはり子供に逢いに來たのだ。男は手を突っ込んで、既にチェーンを器用に外していた。

モヤモヤは慌てて子供部屋の坊やに飛びついていった。この子の顔を見られては拙い、親だもの、やはり見抜いてしまう。どうしよう？　隠したい。柔らかい髪、光が入って、薄色の目。わたしの前髪の陰で信じかねるような坊やの瞳がぱつちりと開いている。山彦！

海彦は、子供部屋に背をむけて郵便物を調べていた、いちいち開き、中を改める。ちらちらと時計を見た。すぐ帰る？　帰って欲しい。

坊やの重さに、モヤモヤの両腕が耐えられなくなって、ベッドに坊やを押し戻した。

イケイケは隣のロッカーの蔭にいるような気がする。彼のいる方向に海彦の注意がいかないように。モヤモヤは度胸を決め、リビングに出て行った。男は透明の窓のある封筒を何通かポケットに突っ込んでから立ち上がった。開けておいたドアがバタンと鳴った。そのあたりで子供部屋のドアが閉まった。坊やが泣きだした。泣いた方がいい、しかめっ面は皆似たようなもの。海彦が子供部屋に入っていく。

「少しは僕に似てきたかな。男は自分の子供でも、自分の子供でないような気がするもんでね……。さてどんな面相になってきたか、見ものだな！」

海彦が坊やを覗き込んだ。坊やは泣き止み眠り始める。すやすや息をする度に、顎の下にはさんだガーゼがかすかに揺れ、鼻孔に吸い寄せられるように三角目を折り返したり、伸ばしたりした。

海彦は手を坊やの額におき、火傷でもしたように手を引っ込めた。わかったのか？ 自分の子供なら三カ月間見つけてきて、モヤモヤの気づかない、いろんな目じるしを持つているのかもしれない。父親の愛情などというものはどんなものなのか。わたしの父なら、家族のなかから、モヤモヤひとりを取りこぼしてあの世へ引越していった。

海彦は長い間、坊やを見詰めたまま動かない。吟味するように、小さな握り拳を押し広げた。だしぬけに顔をあげ、モヤモヤの方を振り返った。

「何時のまにか、生命線が手首まで延びてしまっている！」

モヤモヤは海彦の視線から、さりげなく自分はずすために、じりじり後退りした。いよいよ、人生の裂け目が足許だ。わかっているのに、現実感はまだない。半信半疑、胸には鈍い痛みが、不幸の予感のようにある。

海彦は猫背になって替え玉の坊やを抱き抱えた。イケイケは隠れ場所からこの場面を見ているだろうか？

モヤモヤは警戒していた。逃げるとしても、少しずつ、がらりと場面がひっくりかえらないように……。

海彦の目がモヤモヤを鷲づかみにする。

「これは何処の坊やだ！ 山彦を何処にやった？」

このときモヤモヤは牢獄のなかにいる自分をはっきりと見た。血の気がなくなって、怯えた犬のような声を出していた。

「そんな！ 知らないわ、わたし、知らない！」

「おかしいじゃないか、うちの山彦のベビーシッターが、どうして僕の家で、よその赤ちゃんの世話をしているんだ！ ええっ！ 何時、何処で、何故、誰と、山彦を取り替えっこしたんだ！」

モヤモヤは不可解だという風に首を傾げて見せたが、それっきり声が凍ったように口を閉じた。

「正直にいいなさい。まさか、殺したわけではないんだろう？ どうした！ 何があった？ 殺したのか！ ええっ！ 山彦をか？」

海彦の声は怒りに震え、子供をベッドに取り落とした。

「きさま！」

海彦は言ってモヤモヤの襟首をとって乱暴に引き回した。怖い！ その憎しみ！

「殺して、替わりを持って来たのか？ まさか気が狂っているんじゃないだろうか？」

坊やが火がついたように泣きだした。モヤモヤは振り回されて、ようやくベッドの柵に取り付いて立ち上がった。気が確かかどうかなんて、わたしにわかる筈がない。

泣き声の底に、出来るだけ音をたてまいとしている密かな足音を聞いた。イケイケの足音。こんなところでイケイケが出てきたら、彼まで誘拐や、死体遺棄罪になってしまう。

イケイケの選手生命がなくなる。そう、チームの連帯責任が通例になっているから、チームの出場辞退という事に発展するかもしれない。出てくるな！ 思いとどまって欲しい。

海彦は黒い銃口のような目で、モヤモヤを見定め、赤錆びた声を出した。

「此処で殺したのか？ 死体は何処へやった？ それとも、誰かにさらわれたので、身替わりを見つけてきたのか？ どっちだ！」

モヤモヤは声を出すことも動くこともできない。海彦は探偵のように、子供部屋のなかを観察しはじめ。ベッド、毛布、下着、絨毯、次第に廊下から、浴室へ、血のしたたり、死体の隠し場所を探すように……。

イケイケの潜んでいるのはベランダ。海彦が近づいていく。先回りしてモヤモヤはドアを肩で押え込んだ。一枚向こうにイケイケがいると思う心強さと心細さ。

もうすぐ海彦はモヤモヤの前に立ちはだかる。

除け！ 外を見せろという。動けない、イケイケが見つかってしまう。切羽つまったモヤモヤはいき

なりしゃくりあげる。

「死んでいたんです……。死んでしまったんです」

海彦はゆつくりとこつちを見た。モヤモヤは海彦を導くようにリビングに戻った。

こんな時になって、自分が長い間大声で泣きたかったのだとわかってくる。早く観念すればよかった。どう考えても子供の親に隠しおおせる筈がなかったのだ。

海彦は両手で自分の顔を蔽っていた。この男を殺せば助かるかもしれない。ここにバッドでもあったら、素早く脳天から振り下ろす。

それなのに、モヤモヤの下唇が曲がって上唇を押し上げ、忘れていたこと、死んでいたこと、取り替えたことをつぎつぎ話し続けていた。イケイケと乳児院のこと以外は皆話した。

「どうしようもなかったんです。その他に何の方法も思い浮かばなかったんです。ええ、わたしはほんとに一人ぼっちなんです。二歳の時家族は一家心中してしまいましたから。わたしはたった一人の生き残りなんです。遠縁のおじさんに育てられたんです」

こんなことまで、まるでヌードだ。殆ど心此処にないという表情で、誰かが何かを伝えようとしているから。話しているのが、とてもモヤモヤ自身だとは思えなかった。

その誰かが力尽きてすすり泣いた。

「泣くな！ 泣いてすむことじゃない！」

海彦の額に青い血管が巻きついていた。

ぺらぺら暴露した誰かを憎むモヤモヤは、途方に暮れて立ち上がり、廊下に出てイケイケのいるらしい方向をすかしてみた。わたしにどんな勝算があるというのだ。風が通ったあとのように開いているドア。

「ひとりぼっちなのか？」

海彦がちよっとためらいながら、変な優しい声をだした。

「しかし、だからって、殺したという事実が許される筈もない。わかるね！」

全く愚かなことに違いなかった。誤魔化せる筈もないのに……。

「何の罪もない無垢な子供を殺すとは……、怖ろしいな。山彦には僕の果たせぬ夢を託していたんだ。あらゆる可能性が開かれていた、どんな素晴らしい人物にもなれただろう。総てが無になったということか？ その上こんなにあどけない赤ん坊を盗んで来て、この子のご両親がどんなに探していることか。きみは、悪魔に魅入られたか？ 人と物の区別がつかないのか？ 物質文明にどっぷりつかって、壊れたものは取り替えればよい。取り替えておけば申し訳が立つと考えているとは、全く、驚きだよ。山彦は短い一生をかげろうのように終えたのか。遺体は今、何処でどうしているんだ。冷たくなって、何処に……。早く取戻してこなければいけないな」

このまま 警察に歩いていったらいいのだ。しかし、モヤモヤの足は立つ気がない。そろそろ顔だ

けをあげた。逮捕するつもりなら向こうから来て逮捕して欲しい。それくらいの我侭は許して下さい。

「許して下さい！ わたしの手落ちでした。許して下さい！」

声になっていない。モヤモヤは、もう一度開き直る。

「パトカーに来て欲しい。わたし、ここで逮捕されます。こちらから警察に出向くのは許して下さい」

子供の親に対してこれ以上の残酷な仕打はないのに違う。海彦の血をわけた山彦のばら色だった頬。あのちっぽけなひよこくんの首を捻ったのは、モヤモヤに違うのだ。

失恋の後のような鈍い痛みがモヤモヤの胸にくすぶる。白状したのにイケイケは助けに来てくれなかった。モヤモヤはそのことにこだわっていた。

「何処の子供か知らないが、死体と入れ替わったのに警察に届け出ない親はいないよ。警察が極秘捜査を続けていない筈はないんだ。マスコミには伏せているのだろう。誘拐犯捜査の常套手段さ。どう転んでもきみはもう遁れられない」

何故遁れられないなど言うのかしら、だって、もう、わたしは掴まっているのに……。

手錠を嵌め終えているようなものなのに。

坊やは目を開けて、ほわんとした手で空を掴む。

「きみのその首を締め上げたい。たとえ僕が見逃してあげたにしても、僕の妻の目はごまかせない。

帰って来れば、すぐに人殺しと誘拐犯で、きみを突き出すだろう。妻は、きみが刑を終えたとしても永久に恨み続ける。将来きみが子供を産めば、その子供を殺すだろう。そのとき、きみははじめて、子供を殺された親の気持ちができるんだ。あの女は、恐ろしい女だから！」

あの女？ 恐ろしいのはあの女？ わたしじゃなくてあの女なの？

海彦の顔つきが少し変わったような気がした。

「きみはそう悪い女の子でもなさそうだな。何歳なの？ 二十歳か？ まだ若い。学生か？ そんな優しそうな姿をして、よくもまあ、そんな恐ろしいことが出来たもんだな。いや、何回でも、堂々めぐりだ。なんだか僕の妹みたいな気がしてきたな。そんなに可愛いんだから、恋人もいるんだろう？ 僕としてもきみの一生をめちゃめちゃにするつもりはないよ。どうしたところで、山彦の命が甦ってくるわけじゃない。一時の感情にまかせて、きみを警察に突き出しても……。そう、僕の気ははれない！」

海彦は妙にやわらいだ笑顔をモヤモヤに向ける。笑うな！ 笑いどころじゃないんだ。どうしたら海彦の気が晴れるのか？ モヤモヤにもわかってくる。

「聞いているのか？」海彦がいらだった。

「ちよつと変な話かもしれないが、山彦の命を救うような気持ちで、山彦を殺したきみを救つてあげてもいい。きみが、僕と、ある約束をしてくれればだが……」

モヤモヤはその言葉をまともに受け取らず、今までよりもっと怯えきつていた。

海彦は又もモヤモヤの襟首に手をのばした。モヤモヤは後ろにさがった。こうなるのは始めからわかつていたような気がした。この息ずかい。

モヤモヤは背中であままでの距離を測った。男がにじり寄る、モヤモヤは身をかわした。男は長い手をガラス窓について身を支えた。この目つき。

「やってくれるじゃねえか、ええっ！ きみの未来なんてものは、もう決まった。最も、それとて、僕の出方次第だが。わかっているのかな？ なよなよさんよう！ その気なら、いい生活を約束してあげてもいい、そう言ってるんだ。あとはきみ次第だ！」

海彦が窓の外に目をやった。暗くなっていた。青黒い空。海彦は窓を開けた。冷たい夜気が動いて来る。一瞬、息を呑んだ。モヤモヤはもんどり打ったように、暗黒の井戸を見下ろしていた。七階の窓の下にある張り出しにイケイケが危なっかしい姿でとりついていて。井戸の底のような青黒い空、

眩暈がし、方向感がわからなくなる。モヤモヤの頭を中心に黒い宇宙が回転しはじめる。闇がざらざらした銀色の渦を呑みこんでいる。モヤモヤは渦に向かって墜落するように窓にとりついていく。互いに引っ張り、振りほどき、三人の息が突風のように八方に吹きだしていく。

「助けて！ 助けて！」

モヤモヤの声が糸を引いて巻きつく。三人は浮遊状態にいて、巨大な宇宙を一巡りしてきたように、現実の穴のなかに折り重なって落ちた。

息切れの波に乗ってイケイケが立っていた。髪が角のように突っ立ち、シャツの袖が綻び、顎や腕に傷。助かったのだ。モヤモヤは彼の胸に顔を埋める、まだ動悸が弔鐘のように響いていた。

邪魔物にイケイケの大きな胸から振りほどかれる。手を縛られた海彦が、自分のネクタイで括られた手を必死で振り解こうとして、体当たりを食らわせたのだ。海彦は苛立って置きっぱなしになっていたタルカムパウダーを蹴り上げた。白煙が部屋一杯に立ち込める。イケイケは咳き込み、粉まみれになって、海彦の足を括りあげた。

「参ったか、このヤロー！ 息子の死体を目にもしていないくせに、どうして、自分の子供の死をそんなに簡単に信じられるんだ！ 変じゃないか？ 本当に子供を愛していたんなら……。どうやら、僕ら、この男の弱点を握ったようだな！ この男は、子供の死をっていたんだ、となると、女房を何とかしたいんじゃないかな？」

猿轡をかまされた海彦が、盛んに目でものを言っている。

こんな修羅場にあつて、何故かモヤモヤにとつて、何もかも他人の身に起つていて、現実感から遠い。さしあたって転落死しないですんだだけでも充分だった。

「この人を縛り上げた以上、もう何もしない方がいいわ。あとはわたしがやるから……」
勇ましいことをか細い声でモヤモヤは言い切る。

「こんなことをしてしまつて、この男を殺さなければならなくなつたかもしれない……」
海彦は妙な唸り声を発しはじめる。

「うう、ううう、うう、ううう」

その目つきはモヤモヤの動きを追つて動く。助けてくれ！ ほどいてくれ！ と言っているのか？
果てしもなく、うう、ううう、うう、ううう、ううう意味不明のリズムを発し続けた。信号のつもりか？

イケイケは海彦をおとなしくさせるために、拳を振り上げたが、振り上げた手をおろして肩をすくめた。

、海彦は床に体をぶつつけはじめた。

「これじゃ、下から文句が来るかも知れないわ」

イケイケは海彦の背後に果物ナイフを突きつけて言った。

「声をださないなら、猿轡をとってあげてもいい、どうだ！」

海彦は顎を大きく上下に振った。モヤモヤは海彦をいらだたせないように、そつと、ぎこちない手つきで猿轡をほどこいた。口を開けて息を吸い込むと、時をおかず素早く口にジュースを押し付けた。海彦はやむなく呑みこんで咳き込んだ後、笑い出した。笑うと道化のように見える。

「ああ、びっくりした、まあ落ち着いてくれ！ きみたちは何か勘違いをしている。僕はきみが危なく落つこちそうになっていたから、手を引つ張りあげようとしたんだ。僕が突き落して殺そうとしたでも思ったのか？ まあ、慌てるな。きみ達は恋人同士らしいが、僕を殺したところで逃げ切れな いぜ。ここに来たことは、みんなに話してあるんだからね。ようく、落ち着いて考えてみるんだ。僕はねえ、きみ達が、その決意をすれば、助けてあげてもよい、そう言っているんだ。警察に突き出すことはしない、そう言ってるじゃないか！ 僕の提案は、きみ達の場合、たった一枚のカードだけど、僕の場合、何枚かあるカードの中の一枚にすぎない。わかるかな？ 僕の妻をきみ達が殺すというのなら、協力を惜しまないよ。決してきみ達に疑いがかからないように工作してあげよう。あの女は殺されても仕方のない女なんだ。通訳だが、やれ、シンポジウムだ、レセプションだなんていつて何をしていることやら。山彦のミルクにワインを入れて飲み、頬が紅くなったとか、良く眠るとかいって喜ぶような女だよ。きみみたいな子供に山彦を半月も預けたまま外国に出かけるなんて、もともと非常識だよ。しかし、きみ達はもう何を言ってもはじまらない。殺してしまい、別の赤ん坊を誘拐

した後なんだからね。二人で力をあわせて、それができたんだろう。あれを殺すことだって出来ない筈がない。きみたちは怪しまれずにやつてのけることができるさ。どうかね。きみ達はこれを決行しなければ、どうにも動けなくなるぞ！」

「奥さんを殺したいのなら、自分で殺せばいいさ、おれがアリバイ工作をしてあげるよ。誰にも言わない」イケイケが拳を握り締めた。

「悪いことは言っていないんだがな？ 気を取り直して御覧、いますぐム所に行くかどうかの瀬戸際なんだよ。ム所に入ってしまったえば、警察はきみ達を徹底的に調べ上げる。マスコミも容赦しない。総て終わりだ。無理難題だと思ふことはない。赤ん坊が簡単に死んだように、大人だって、もろいものさ。みんな遅かれ早かれ死ぬ。きみの境遇なら、自分たちの幸福のために、人の死を利用してもらうてもそう悪いことじゃないと思うがね」

海彦の口元がいかかわしくゆがんでいる。体を縛りあげられ、刃物を突きつけられ、しかも二対一なのに、互角以上の形勢だと思っているのが不思議だ。

「このましまろみたいな娘一人では心もとないが、きみとなら、ことはうまく運ぶんじゃないかな。きみは運動選手だな、見ればわかるさ。連盟にしたらどうなる！」

「彼は何も知らないし、何もしていない。勝手な憶測をしないで下さい！ 迷惑です。総て、わたしひとりでやったことだわ」

「そうか、そうか、きみは彼のことがそんなに好きか。見かけに寄らずきつぷはよさそうだ。しかしね、元はと言えば、この娘を掴んで離さなかった男のせいだと僕は睨んだ！」

何か妙な具合なのだ。親分からものを言われているような。

「あんたが殺せばいいじゃないか。こっちは拍手を送るよ。僕達にさせようたって、そうはいかないさ。それに、言っておくけどね、僕ら、誰も、殺してなんていないよ。勝手に殺人犯にされてたまるか！」

「きみ達が僕を殺さなければ、女房を殺せるが、こうやって縛られている以上は殺せないね。それとも僕を解き放つてくれるか？」

うんざりしてふたりは見詰め合う。海彦は興味深げにじろじろ二人の顔を眺めまわしている。縛り上げていても脅迫者は依然として海彦なのだ。

「わたしが一人でやる。あなたは早く帰って！」モヤモヤは小声で言った。

「そうは行かないぞ！」海彦は首を回して、イケイケの持っている果物ナイフに自分の首を擦りつける。海彦の動きによって、イケイケのナイフはじりじり押し捲くられた。

海彦は微笑を浮かべ、やがて高笑いした。

「この、クソツタレが！」

野卑で不死身の人間を見て、ふたりは体を寄せ合って、こちらがナイフを突きつけられてでもいる

ように立ちすくんでいた。

7

朝がきていた。とうとう一睡も出来なかった。海彦は縛られていながら、またも、わたし達を支配しはじめる。

何時の間にか、モヤモヤは言葉を幾つか練習させられていた。海彦の妻と同じ地方の出身だから、アクセントが共通していて、電話を通すとそっくりに聞こえる筈だと海彦は言うのだ。モヤモヤ自身、彼女そっくりに真似ていることが得意で、イケイケの奇妙な顔つきが面白かった。

早速、海彦の言う電話番号に電話する。

「完璧、大丈夫だよ」海彦は励ました。

「私、林でございます。ああ、五明さん？ H光学の株価はいま何円になりました？」

教えられた言葉を続けようと思うのだが、相手の社員は仕手の動き、経常損益、新技術、無償増資、……と、次々しゃべりまくった。そういう時はふむふむと鼻で合槌をうっているようにと、海彦は指

示した。

「寄り付き、H光学一万株、手仕舞い売り。N鉱、五万株新規買い」

「どちらも、成り行きですね。ご旅行からお帰りになったんですか？」

「いいえ、アメリカから」

「それでは、二十五日の午後五時頃お伺いしてよろしいでしょうか？」

「ええ、では……」

モヤモヤは当惑し、まだ話しつづける証券マンの鼻先で電話を切った。

「妻は株の取引をしているんだが、郵便物を僕が見たところでは、出発前日の取引で、ほぼ手持ち資金一杯、買いにまわっている。この二三日、大暴落だし、さすがの彼女も忙しくて動けないでしょう。今の注文も含めて、月末には精算しなければならぬ。彼女が帰ってきたら、証券会社の社員が此処に押しかけてくる。彼女は自分の知らない取引に怒る。相当、もめるはず。きみ達は予めそこにひそんでいるんだ。社員が怒って帰ったら、彼女は証券会社の幹部に文句の一つもいいたく電話する。それがあいつの行動パターンだ。その時がチャンス！ 彼女の背後から、このロープで締め上げるんだ。わかったね……。ところで、その前に、このロープを解いてくれよ」

海彦は顎で膝の結び目を叩いた。からかうように片目をつぶると目尻のバンドエイドがよじれてぶら下がった。

ふたりは今までのどの場面よりも、むごたらしい場面を想像して縮み上がる。子供の取り替えっことは大違いだ。

「どうだ！」海彦は繰返す。

「いいよ、やってやろうじゃない。そんなに、そんなことがしてほしいのなら」
イケイケが豹変した。

「駄目よ！ あなたは駄目！ やるのはわたしよ。わたしの方が誰だって油断するのよ。意外性、それこそ、成功の絶対条件なんだから！」

抱かれていた坊やが、モヤモヤに微笑みかけた、涙で一杯になった目で。

「ごめんね。きみにこんなひどいことをしてしまっ……」

唇の形のいい富士山が水ぶくれみたいに腫れあがっている。坊やがじっと見ている、もう少しでその目にモヤモヤの涙が落ち込むところだ。イケイケが坊やを受け取った。

「乳児院に戻してくるか？」イケイケは小声で言った。

突然電話が鳴った。イケイケは早く出るといつている。モヤモヤは響きの恐ろしさに頭がぐらぐらし、髪が顔に被さって視界が見えなくなった。

「はい、わたしです。いらしていません。……別に……」

言った後で聞いた言葉が、耳のなかで転がり始める。

「——林さんの奥さままでいらっしやいますか。専務がそちらにお出でじゃございませんか？ ええ、ご新居の方にお電話しましたけど、ご不在なんですすよ、困ったわ、おかしいわ、何かあったんでは？」

「——」

イケイケが海彦の足と手をくくったロープを解いている。

「僕はきみ達が心配するような卑怯者ではないよ。犯罪者のきみ達とは違って、まっとうな人間なんだ。たまたま、きみ達と希望が一致したということだ。協力しないでどうする。僕の計画通りにことを運んでくれるね！」

「とにかく、ここを潜り抜けるんだ。考えるのは後だ」イケイケが息だけで言った。

わたし達があげたグラスが震えた。海彦の用意した三つのブランデーグラスがそれぞれの恐怖でぶつかった。ヤクザが盃をかわすのに似ていた。

「ああ、情ないね、きみ達みたいに若い子に手足を縛られ、猿轡をかまされるとはな」

「いやあ、すみません。全く、僕としても必死でしたから、悪かったら謝ります」

彼は帰らなければならぬのだ。再来週、もう一試合残っているんだ。

「後は、うまくやるしかないな！」

海彦は穏やかにいった。

「ところで、坊やはどうします？」

イケイケが海彦に聞いている。モヤモヤは山彦の分までも、この坊やに愛着を感じだしていた。モヤモヤも、もて余まされていたのだ。

「元に戻すこともできないから、僕が何等かの方法でかたづけよう」

「片づけるですって？」

モヤモヤは狼狽して蒼ざめてしまう。

「いけないわ。もうこれ以上は！」

モヤモヤは激しく首を振った。

「僕の子供は殺しておきながら、替え玉には嫌に同情的なんだな。わからないのか、きみ達は大仕事を引き受けたんだ。手足まといになるものは、他のところに預かって貰おう。いずれ僕が引き取って自分で育てるよ。失った子供の変わりにね」

海彦は二人に思わせぶりな目くばせをしてから、肩を怒らせて出ていった。

「二人でずらからうたって、出来ない相談かな？」イケイケがつぶやいた。なにやら異体の知れない不安が、ふたりの胸中で暴れまわっていた。

「大丈夫かしら？」

「一つだけわかることがあるよ。それは、二十五日までは安心だということ。あの男は、夫人を殺したくてしょうがないのだからね。彼は新しいマンションの最上階に住んでいるんだ。別居状態にある

夫人が死ねば、あの男に真つ先に疑いが行くに決まっているんだ。馬鹿な男さ！ 僕らの勝ちかも知れないよ！」

イケイケは愛おしそうにモヤモヤの肩を抱くと、力づけるようにキスをした。そんなことをされては、赤いさざ波をなだめようがない。下に行くスマートな外車は海彦の車だ。

「でもあの男は、それまでにアリバイだらけになっているわ。あの車何処かで見た、そんな気がする」
「そうか、おれ、あいつを信じられない！ 林海彦をつけて見るよ。調べあげてやる！」

「駄目よ、合宿なんでしょう？」

イケイケは息をつく間もおかずにドアから、飛び出して行った。

引き戻そうにも彼の流れはもう、逆流したりしないだろう。ジーンズの膝や腿や尻に、白い粉がついていることや、もう、この件について手を引いて欲しいことを、モヤモヤは言おうとしたが間にあわなかった。イケイケは見ている内に蔭のように黒くなった。

イケイケのために、いや、彼と一緒にの未来のために、どうしても生きたかった。モヤモヤは死を呼ぶ魔性の女？ イケイケはそんなことも知らずに、命がけてモヤモヤを護ろうとしている。

生きるためには他人を殺すしかないのだ。多分、モヤモヤはそれをやって抜ける能力を持っているのだ。

新聞は読まない、テレビもニュースが怖い。モヤモヤはテレビでサスペンスの梯子をした。モヤモヤと同類の女達がいて、殺されるか、警察に突き出されるか、どちらかの運命が待っていた。

坊やの頬に涙が一粒きらり光って見えなくなった、モヤモヤは坊やを抱いてふらふらと階段を降りていった。真昼なのに人気もない、春が近づいた明るい陽ざしに、道路の雲母がダイヤをばらまいたように光って、目が眩んだ。

坊やは驚くほど重くなった。膝でずり落ちそうな重みをせり上げると、坊やは火がついたように仰け反る。街路樹の根元にそっと坊やをおいた。

樹はあなたの友達、草木はあなたの兄弟、土はあなたの父母！ここにいたら淋しくはないわ。

坊やは何時までも泣いている。それが、モヤモヤには天から降下してくる山彦の声のように聞こえた。声は山彦のように時間差をおいて、次々に響きつづける。

顔をあげると坊やを見知らない女が抱いていた。長身、アップにした髪が後ろで蛇のようにとぐろを巻いていた。白いブラウスに青い花模様の七分パンツ。私服の刑事だろうか？

「あら、ごめんなさい。あなたのご兄弟？ 捨て子かと思つて、抱きあげちゃつたのよ。何か月？」

「三カ月です。大きいんです」

「何月生まれ？」

「……」 咄嗟に出て来ない。ああ逆算すれば？ わかつていても、数字が群がつて捉えられない。

「よく覚えていないのね」女が笑いを堪えている。わたしは慌ててベビーシッターという言葉を呑み込んだ。

「わたしの子供です！」

「まあ、お若いママさん！ 持て余しちゃつてるのね。ご近所の方？ 可愛い赤ちゃんだこと。四五カ月くらいにみえますね。盗まれないようになさいよ。ほら、しっかりして！ そんなへつぱり腰じや駄目よ！ ママさんなんでしょう？ とても、そうは見えないけど？ まるで、赤ちゃんが赤ちゃんを育ててみたいね！」

モヤモヤは抗議するように、坊やを奪い取つた。女の瞳がモヤモヤを見据えている。

「お名前は？」

「……………？」

「赤ちゃんのお名前は？」

「山彦、林山彦。変な名前でしょう！」

やはり、刑事らしい。ごく、自然に。そう、ここで疑われてはまずい。海彦が警察に知らせたのでは？

「始めてのママは、みんな、持て余していらつしやる。危なつかしいけど、まあ、頑張りなさいよ！」
女は底意のない様子で離れていった。

でも、多分、刑事、刑事は刑事。乳児院から届が出ているのかもしれない。乳児院は面目を振り捨てても、この子を探し出そうとしている。坊やの顔も、この近くだということも、名前まで、すっかり知られてしまった。その方がよかったのか、悪かったのか、もやもやにはわからない。

いま、海彦が届け出なくても、最後はモヤモヤが林和歌殺しの容疑者に残る。殺しは誰がやっても、海彦はこの子を警察に届けるだろう。動かぬ証拠として。

乳児過失致死罪、運が悪ければ、乳児殺害、死体遺棄、乳児誘拐、海彦に対する暴行障害、悪くすると殺人未遂、住居侵入、それに今度は夫人殺害、まだ何かあるのかもしれない。

みんなモヤモヤのものだ。

「この、絢爛豪華な罪状をみて！ どれも現実で、わたしの確実な未来なのよ！」

けたたましいロックバンド。鳴り物入りでイケイケが帰ってきた。Vサインをしている。

「乳児院の様子を探ってきたよ。あそこを通ったら、例の浮浪者がいてね、勿論生きていたよ。昼間見ると、あそこは自然公園になっていてね、ベンチがあつて、それが彼の住処なんだよ。それで、おや、と思ったわけ。何かがあつたら、あの浮浪者が真つ先に不審尋問されたと思うんだ。若葉マークのシャツやなんか持っていただろうし、警察にしよつ引かれて、どこか収容所に入ったかなと思つたのに、まだそこにいたということとは……つて僕は考えたのさ。乳児院の隣りに児童施設が併設されていてね、園児とボール遊びをして、保母さんにそれとなく……」

「どんな風に聞いたの？」

「とてもうまくいったんだよ。こそばゆかったけど、春休みにはバイトをして、子供の日には仲間とプレゼントを持ってきたいものなどと……。やだねえ、いざとなると、言うことも、やることも幼稚だから、おふくろに軽蔑されるわけさ。幼児と乳児合わせて、どれくらいいるのか聞いてみたんだ。幼児は十五人、乳児は二十七人、と言っただけど、ああ、そうだ、この間一人亡くなったから、二十六人だわって、訂正したんだよ」

言っただけでイケイケはロックのリズムに乗って、口についたビールの泡をすごいた。酒類の所有は海彦だとわかったから、遠慮はしない。

「保母や看護師は定員の半分もないんだそうだ。死に顔では区別がつかなかったんだな」

「わかったとしても、赤ちゃんを虐待したかのような抗議を受けることにもなったら、乳児院としても、たまらないわね」

「ことを隠蔽しちゃったのかな？ なにかうまい方法で病死として届けたのかもしれない？ そうだ、乳児の突然死がいいな？ この間新聞に出ていたよ。嘱託医もあることだし、案外簡単に……」

「イケイケ、その保母さんにじつと顔を見られたでしょう？」

「頼むから、しよぼしよぼするなって！ こういうのって、結構面白いよ！ 探偵みたいで……」

「強がり言って！ 坊やは、あの男が来て連れて行つたわ。散歩から帰つたらすぐ、まるでわたしを持ちて余している現場でも捕らえたみたい……」

「誰かに見張らせているのかも知れないな。時間があれば、坊やを殺したのは、あいつだということを実証してやるんだが……。きみのせいじゃ、絶対ないんだよ。僕にはわかつているんだ！」

「あなたは、わたしを買い被っているのよ。わたしは子供の頃からの殺人鬼なの。わたしにはわかるのよ。だから、あなたには早くわたしのそばから、離れて欲しいの。ほんとよ！ お願いだから、わたしの外見に誤魔化されては駄目よ！ それが命とりになるんだから……」

イケイケの目が点になったあと、嫌々でもするように大きく身を揺すった。

「夫人殺しは二十五日ね。もう、わたしは戻れないわ。それなのに、あなたが、変な動きをしたら、

どんなひどいことになるかわからないよ。あいつに警戒されたり、他人に目をつけられたりしたら、お終い。わたしは大丈夫、どんな、大火事からも、溺れそうになった海からだって、立派に生還してきたのよ。でもわたしの代わりに必ず誰かは死んでいるの。だから、イケイケも、もうわたしのことは忘れて！ 何もかも終わったら、必ず逢いに行くから……」

「あいつの、夫人を殺さなければならぬ直接の理由がもう一つわからないんだ」

二人は泡の溢れだしている二杯目のジョッキを持上げた。これが人殺しムードか？

「自殺に見せかける殺しかた……。むずかしいな。あいつを奥さんが殺したと思わせる殺し方なら……。いや、いけない。やつの思い通りには決してならない。そうだ、あの男だけを殺せばすむ！ あの男が坊やを他人に預けたとすると、総てをあの男に転嫁できるかもしれない。たとえ、自分の子でないようなことを言って預けたとしても意味はないさ。夫人だって全部ご主人のやったことだと思いに違いないさ。あの男、山彦を自分の子供でないと思っていたふしがあるからね。血液型を気にしていたらしい」

「そう、でも、あの男を殺すしか方法はないわ。奥さんを殺したとしても、あの男を生かしておいては終わりがこないもの」

「きみも何だか、魔女っぽくなってきたねえ。その顔で、全く、意表をつき過ぎるよ。そうやってみたい欲望もわからないでもないが。大きな声を出すんじゃないぞ。何時までも、モヤモヤでいるんだ！

わかったね！」

ひそひそ進めている話題のせいだけでなく、どかんどかん響く音楽のせいで、心臓や頬がびびび、び、び、び。ビールがどぶん、どどぶん。

「やつの住んでいるマンションも見てきたよ。買い手がついたところも、まだ、内装中というのかな、つまり入る前に好みに合わせて内部を造るらしい、空地の関係で、上の階に行くほど削り取られた形の、ほら、両側が斜めの道路みたいになって細くなっていく、ああいうのだけど割と立派。いま、家具屋やガス屋や水道屋も入っていたよ。入り込むのは簡単だ」

「ああそれなら、わたしでも大丈夫だわ。ああいう斜めの勾配を登って大泥棒をやって見たかったのよ！」

「僕は、スポーツやってるから身軽だけど、モモは駄目！ 登りついたり、飛び降りたり、そんなアクロバッドはきみには出来ない。気持ちにはわかるけどき、僕にまかせて欲しいな。行つては駄目だよ。屋上の鍵は何時もかかっていて、誰も上に出られないようだ。多分あいつが持っているんだ。両隣から入る手もあるが、彼の真下の部屋は買い手がついたらしくて、職人が出入りしていた。僕、だったら、中に入れるかもしれない。もしたら、上に登って、ベランダから最上階の部屋に忍び込むことが出来る。ひそんでいて、あの男が帰って来たらやる！」

「どうやって？ 血をみるなんて嫌。あなたにそんなことはさせないわ。どんなことがあっても。あ

あなたの一生をだいなしにしたくはないもの」

イケイケは優しかった、それに甘えすぎる。こんな時は皆逃げていくのに……。イケイケは違う、違った、モヤモヤは胸が痛い。もつと悪人でいてくれたら……。

「あの男は二十四日の昼ごろ、最終的な打ち合わせを電話でするといつているわ。奥さんが二十五日の午後には帰ってくるのよ。二十五日にかけてはアリバイを作るために、東京を離れるのでしょうか。しっかりとしたアリバイのできる場所、少々の時間では往復できない遠いところに行くつもりだと思ふの。とすると、二十四日の晩は多分自宅で夜を過すわ。旅の支度もあるでしょう。決行するのはその夜、明後日の夜。わたしは自分でやる。お願いだから、虹二はもう手を貸しては駄目！ わたしはファイト満々よ、悪女は悪女らしく、魔女は魔女らしくやるだけ。モヤモヤは、不敗！」

「また、また、自分を買い被りすぎてるよ。僕がやる！ きみは家で目を閉じていたらいい。なに一瞬の間だろうさ。駄目だ、どうして一人で決行するなんていうんだよ。きみに策略があるのか？ たいたした策略もなしに殺るといふことは、破滅だ！ きみはこの間だって、僕に支えて貰ってやつとだつたじゃないか。その点、僕は力も、運動能力もある。注意力も情報能力もある。大概のことは易々とやつてのけられるんだ。成功の確率は百パーセントでなければならぬ。とにかくやつは二十五日まで安心している、そこを狙いだ！」

「二十四日は、あなたはアリバイのはつきりとしたところにおいて欲しい」

「こら！ きみには出来る事と、出来ない事があるんだよ。こんなことを話しているだけで、顔が真っ青だ！」

イケイケは嘘をいつている。モヤモヤのなかを熱い血が駆け回っている、毎年ラグビーがオフになると春がやって来るのだ。

「いいかい、きみはなにもしないんだよ。何処か別の場所で自分のアリバイをきちんとつくっておくこと。いいかい、方法は僕が考える。ことは、この間の取り替えっことは、違うんだから」

イケイケはモヤモヤをみくびって自信ありげに言った。彼が決行する前に、わたしが殺せばいいのよ。それには一人でもいい方法を考えなければならぬ。

人間一生に一度くらいは、誰だっていい考えが浮かぶのだと思う。でなかったら、こんな複雑な大量の脳細胞を頭に頂いている甲斐がない。

イケイケがわたしを始めて見るような、疑い深そうな目つきで見直していたが、今はこれ以上言わない方が得策という、保護者顔になった。

モヤモヤは甘えて、キスをねだる、最期かもしれないのだ。これが幸福の絶頂なのかもしれない。イケイケと別れると、モヤモヤはだんだん小さく弱く暗くなっていた。

ベッドのなかで必死に考え続けた。自分の為と言うより、まるで彼への愛のあかしであるかのよう

何回か忍び込み、何回か毒を盛り、火をつけ、ナイフで刺し、首を締めた。想像を繰返しながら、うとうとすると、体がどんどん落ちバーンと跳ね返った。びっくりして飛び起きた。落下感は夢のなかでよくあることだけど、どこかに爆発があったような気がした。

ガス爆発！

モヤモヤは宿題のすんだ小学生のように、すぐにぱたりと眠り込んだ。

9

朝刊を見たが出ていない、古新聞を引っ繰り返した。ガスもれによる爆発事故で爆発した元の部屋と同じ位、或いはそれ以上に破壊が大きかった真上の部屋。コンクリートや、鉄骨がアメ状になって破壊されていた。

問題はどうかやって、イケイケの言っていた下の部屋に入り込むかだ。しかも、彼より早く。時間がなかった。とにかく行って様子を窺うしかない。死体安置所に向かうみたいなのが妙な気分。少しプラグがゆるんでいる小さな電気釜をダンボール箱に詰めた。

モデルルームは二階にあると書いた紙が貼ってあるマンションの自動ドアが開いた。フアイト！モヤモヤは踏み込んでいく。受付は閉じており、モデルルームを御覧になりたい方は本社に電話するようにと書いてあった。

わたしは何でもやっつてのけられる魔女。どうしてよいかわからなくて足が震えていた、この間までのモヤモヤじゃなかった。するする入り込んでいく、誰にも逢わない。入居済みは二階三階に多く、図面をみると、林海彦は七階の全部を占めていた。中を覗くと壁面一杯の下駄箱が見えた。ドアの上や新聞受けに鍵が隠されていないか？ 探ってみたが、そうおあつらえ向きにことは運ばない。モヤモヤは自分の甘さに、物慣れたこそ泥のように舌打ちした。六階に降り玄関から入った。右側がアーチ型になっていて、その向こうに働いている職人がちらほら見えた。

これでは、このまま中にひそんでいるしかない。素早く樹海の壁紙の部屋に入り込んだ。

自然志向なのか樹海の壁紙。グリーンの濃淡を通して、光がきらきらたわむれるなか、よくみると一方の面に細い直線が何本か見える。クローゼットの襖。わたしは子供に返ったようにクローゼットに入りこんだ。建材と塗装の臭いが鼻につく。底を叩く物音。ともすれば誰かに押し込まれているような、ここに逃れてきた感じ。一時間ほどたったとき、人声がして、電話をとりつけるらしい物音がした。

身を隠して、時間の過ぎるのをひたすら待っていると、出来事も、目的も総て遠のいて。モヤモヤ

自身、目に見えない場所に整理され、目にもえないものになっていくような……。

何も起らない。物音だけが二日酔いの足音のように聞こえる。喉が渴いてくる。足音を忍ばせ、部屋から出てキッチンに入った。水道の栓を回すと、空気が噴出し、慌てて手で蛇口を押えた。生ぬるい水に、濃厚なカルキ臭。もうすぐ、職人が引き揚げるに違いないと思う頃、女の声が出た。

「このパステルカラーは、ぴったりだったわ。いいなあ、甘いほんわかした気分！」

この声！ 聞き覚えがある。どうしても覗き見をしたくなつて、部屋から首を出した。ストッキングだけで爪先立ちしている。孔雀色の細身のドレス、派手な腕輪、次に、アップにした髪。全身を見た。頭が小さく、背が高く、玄人っぽい女。こちらを斜交いに見たのかもしれない。首が長過ぎるような気がした。蛇に見込まれた蛙のような気分、そう、あの蛇女だ。わたしはクローゼットに後退して、そっと戸を閉じた。

「どうやら、間に合いそうね。冷蔵庫はそこ、食器棚がこっち、二十八日には入居する予定なのよ。急いで頂戴」

物を置く音に数人の足音が重なっている。こちらに来る？ 爪先立ちでは足音もしない。

「このグリーンの壁、見本はもうちよつと黄みがかつていたんじゃないやなくて？ 少し陰気な感じもしないでもないわ。樹海で自殺する気分になつては、不吉ですもの、やり直してくださいさる！」

この声……。聞き覚えがある、あつ、女刑事かと思った女、女刑事が手品のように、蛇女に変身し

ている！ 蛇女がこのクローゼットの前に立っている証拠に、マニキュアの爪が凶器のように伸びて、モヤモヤの鼻先で襖のわずかな隙間を閉じた。

「明日はピアノを運び込んでください、辺に傷をつけないように。位置は床が補強されている、そこ、そのあたり……」

女の指図する声が遠くなった。その後何分か、がたがたしていたが、男達が引き上げていくらしい荒々しい音のあとで、カチリという小さな鍵の音が過ぎた。反動のように体が飛び上がってから、がたりと落ちる。内から開けられるのだから大丈夫よ。

誰もいなくなると、不安な静寂が満ち満ちた。様子を窺ってから、せかせかと立ち上がり、水でハシカチを濡らして額にあてる、苦行だった。押えていた息が悲鳴のような音をたてる、背中が痛い。身を縮めては伸ばした、何度も。掛け金を回してベランダに出る。もう、誰もここにいないのに、音を立てないようにやっつてのける、たった一人のパントマイム。脚立？ 二つに折りに曲げると脚立、伸ばすと梯子になる。爆破する前に、海彦が、今晚ここにいかどうかを確める必要があるわ。これで登って、上の部屋の様子をみなければならぬ。

とてもうまくことが運んでいるのかもしれない。彼を殺人に巻き込まずにすむ。今、一人だと言うことは、最後の砦は護られていること。これから真夜中までの恐怖は余裕を持って耐えられる。

そう、彼よりも先に。時間の経過はとても遅い、壁紙の上に手を滑らしてみる。黄昏の光のなか、

バラをあしらった壁紙のリビングルーム。この悪趣味ももうすぐ消えてなくなるのね。とぼつちりを受けるのが、あの蛇女のものだということなら、少しは心も軟らく気がする。

何が、赤ちゃんが赤ちゃんを育てているだ！ わたしの外見への恥辱、内部への挑戦。殺しへ、浮き立つ想いもあるなんて。

モヤモヤとイケイケだったら、こんなマイホームにはしない。リビングはもつともつと広く。家中に暗がりをもつもなくする。寂しさなんかどこにも忍び込まないように。

こちらはイケイケの部屋、そっちは子供……、どきんとして身震いをした。重要なことは、ここを爆破し、あの男を殺すことだけ、無心で！ モヤモヤは自分に言い聞かせつつづけては、頻繁に時計をみた。

早く時間が過ぎてほしい。爆発で死ぬのにそんなに時間がかかる筈がないのに、殺人までの時間はこんなにも長く、気が狂うほど待ち遠しい。時間よ、ぐずぐずしていたら、イケイケがわたしを探し始めるのよ。しっかりしていてほしい。イケイケとは何事にも前向きな、行動派の愛称。即実行派の揶揄から、来ているらしい。小学生のときから彼はイケイケと呼ばれて来たのだ。

さまざま建物吐き出す排気のように、影が地の底の方から積もってきて、ついに夜がきたころ、鍵のまわる音がして、六号室の玄関ドアが開いた。男と女の声と足音、スイッチを入れる音。

「アーチ型の部屋が夢だったのよ。こういう部屋に住みたいって、何時も夢見ていたわ。実現出来る

なんて、ほんと、感激！ パパの御蔭！ 出張の前にお見せしたかったの……」

蛇女の声が浮ずっている、男の声が何か言ったが良く聞きとれない。

モヤモヤは暗さの圧力につぶれそうな目を、明かりで軟わらげたくなくて光を追いかける。途端、彼らの影がゆっくり動いた。モヤモヤの影が生まれて、すぐに夜に逃げ込む。

「二、三週間ほど、ことの成り行きを見てからにしろよ！ どう転ぶか？」

海彦だ。なんだ、そういうことなの、二、三週間……と言っている。この女に夫人殺しの計画を話しているのかもしれない。この女も殺さなければいけないの？ もうひとり？ 困ってしまう。

この女、偵察に来てモヤモヤに脅しをかけたわ。この成り行きでは夫人の帰国前、海彦と一緒に上の階で一夜を過ごすのだろう。ことは簡単、この女の夢は今夜、こつば微塵に砕け散るのよ。お気の毒ね。わたしの外見がくれんぼしたいといい、軽く見られ、侮辱をうけたと思っている内部は露出を主張している。

「ここから、階段で上に行くことにするのね。その工事の出来上がる日が待ち通しいわ。奥様に見つけられたら大変だったけど、うふ、ふ、もう心配いらなのよね！」

この女は姦計にたけて不潔、もしかしたら、この女が震源地なのだ？

「やつらは、うまくやってくれるかなあ？」海彦がのんびりと言った。

「二十五日、いよいよね。あの女の子では落第だけど、助っ人が優秀なら大丈夫じゃない！」

「頭を押えられた上に、他の男の子供を押し付けられては、どんな男だって、平気でいられる筈がないよ！」

「でも、ガムテープを貼られたなんて、赤ちゃんも苦しかったでしょうね……」

「それにしても、お替わりを誘拐してくるとは……。あいつらも、全く、意表をついてくれるよなあ！」

「ふ、ふ、ふ、ふふ」男女の含み笑い。

山彦の口の回り、赤い四角の湿疹みたいなの。あれが証拠だったのだ！ イケイケは見抜いていた。モヤモヤよりイケイケがわたしを信じていたのだ、それが嬉しい！ もう、迷うことはない。この男は殺せる。モヤモヤは膝を組み直した。

玄関から出て、ガスの元栓を開いて引っ込む、用意しておく。空腹に今度は眠気が来る、一度眠ったら総てを忘れて、明日の朝まで眠ってしまえばいい。

眠気ざましに寒いけれどベランダに出た。じっと耳をすましてみる、車の音がめつきり少なくなっていた。二十三日午前零時。

夜の闇に自分を溶かしているつもりでいたが、たった一人、大犯罪を目の前にしているモヤモヤを、優しく包んでくれる筈の闇が白けていた、寒い、三月だというのに。

脚立の上にながって、上の階から明かりが洩れていないか見る。二十三日午前零時三分。どうやら暗くなった。

その時、光線か、なにか、銀色のきらきらが一本、垂直にすいーと降りてきて、モヤモヤの目の前で止まった。きらきら光っている糸の先がしなう。見ると、小さな透明な蜘蛛がブランコをしている。段段加速度がついて、眼が回ってしまふ。こんな時に、不吉な夜蜘蛛。

モヤモヤは手を出して、蜘蛛をたぐり寄せると、咄嗟に丸ごと飲み込んでしまふ。蜘蛛はやがてモヤモヤの胸の中で巣を張り始める？ 拘っている時間はなかった、不吉は困るのだ。

この家の照明をつけ、電気釜に少し水を入れて、そこにあつた大きなダンボールの箱の上においた。プラグをコンセントに差込んでからわずかに引いた。ONにするとぱちぱち小さな火花が出た。爆発した時爆風で飛び出すように、電気釜をリビングルームの窓際に移した。二時間後にタイムスイッチをセツトし、ガスが外に洩れないように外回りの戸がしっかり閉じているかどうかを確かめ、ガステーブルのガス栓をひねった。

体を屈め、足音を忍ばせるつもりが、階段は一步ごとに轟音を発生させ、モヤモヤはその音におびえてしまふ。他人に見られる心配がなければ、建物の斜面を滑り降りたかった。このマンションに住む者は勿論、町の人々の寝入り鼻を襲う轟音のように聞こえて、下の数段は一気に駆け降り、影を伝つて駆け抜けた。二百メートルほど離れた公園あたりまで来ると、まるで重病人のように頭からふらふらした。夜動き回る人種がいるのだ、オートバイが途切れ目なく過ぎて行つた。幾つかのビルの階段室の夜間照明が、縦一列に並んでいた。ここからも、あそこは視野に入る。ほんとにこれで上の階

まで吹っ飛び、二人とも果して死ぬのか。上の階と下の階のコンクリートの厚みほどの程度なのか……。爆発条件というのは微妙なものかどうか……。しゅうしゅうというガスの噴出する音は、まだ耳のなかに吹き込んでくる。ただならぬガスの匂いは鼻から喉から肺に残っていた。

確かに世界が吹っ飛ぶほどの大変なことになるに違いない。そう、信じるしかない。心は痛まない。タクシーを拾いたいけど、足がついたら困る。ふらふらしていたら、尋問を受けてしまう。

あやふやな歩き方で公園まで来て、植え込みの蔭に隠れた。空腹と寒さが一緒になって、とても歩く気力などない。長い間、ぐったり倒れている、幸い誰も来ない。成功を見届けるまでここにしよう。樹々の下から、ぼんやり街灯に照らし出されている車が金色の光を放つ、茂った葉が、トンネルをつくっているのだ。その向こう、あれは？ ……イケイケの車に良く似ていた。似ている車は幾らでもある。しかし、胸騒ぎがして、葉の下を潜って車の近くまで進んだ。人待ち顔の車の表情、遠いところを見詰めているような、ナンバーを見るまでもなく、イケイケの車だとわかる。

どきんとした。なにをすればよいのかわからない。モヤモヤは顎をがくがくさせながら、腕時計を見た、もうその時がきている、もう三分。イケイケがああ男を殺しに、ああの部屋に乗り込んだら！ 口に手をあてた。叫びだしていた。

「嘘よ！ 嘘よ！」彼はあそこに行つてはいない。だって、それを怖れてそれだけを恐れて、安全を期したのに。彼がわたしに殺されるなんて、そんなことはあり得ない。いくらなんでも、神様はそんな

なことは許さない。時間差は一日ある筈。そう信じてみた。イケイケもそう思ったのでは？ モヤモヤは一对の耳をそばだてた。地震を予知する動物のように……。

駆け出していた。早くすればイケイケを取戻すことが出来るかもしれない。あとはどうなつてもいい。少なくとも六階より下に降りられれば……。足は鉛で出来ているように重くて、前に出ない。漸くマンションの脇まで来た時、モヤモヤの目は、上の非常口から踊り出た人の姿を認めた、間に合ったのだ。もう一分過ぎていた。イケイケに向かって手を振り、非常階段に向かって一目散に走った。一瞬、あたりが緑色に膨張した。イケイケはまだ上にいる。

モヤモヤは足を踏ん張って立ちながら、よろけて尻を地で叩いた。耳の鼓膜は裂け、上からガラスがばらばら落ちて来る。黒い大きな塊が鳥のように飛んでいた。何も聞こえなくなった。何時までもこのあたりのいたるところで、空気が連続して爆発し、暴れ回っているらしかった。もはや、感覚が麻痺していた。

息をつくのも、目をあけるのも忘れ、総てを忘れて、どのくらいだったのだろう。気がついて体を起すと、肩がずきずき痛んだ。非常階段の下の方、手すり落ちて宙ぶりになっている。イケイケを探した。めくらめつぼうに探がした。

「モモ！」イケイケが足を引きずっていた。モヤモヤは彼に抱きついた。

ガラスの砕け散っている道を助け合って車まで辿りついた。車は押し殺した音で滑らかに走ってい

く。どれくらい行ったのだろう。車が後輪の一つでぐるぐる回っているような？ 眩暈がした。イケイケの手から血が流れていた。血がハンドルにぬらぬらまとわりつく。頭から、流れているのだ。くやくにや波打った曲線を走っているような？ 良く見ると、車の前はガードレール。わたしは彼にのしかかるようにしてハンドルを奪う。激突！

モヤモヤの頭の中はミキサで掻き回されていた。臉が痙攣していて、目をすっかり開けるまで時間がかかった。

何日も彼の容体を聞けなかった。唇から弱々しく息が出ているだけ。

わたしがイケイケを殺したのでしょうか？ 神様、イケイケを助けて下さい。もともと彼には悪意など微塵もなかったのですから……。

それでも悪運の強いモヤモヤは死ぬのが怖いかのように健康になる、肩身が狭いほどに。病院にいらうちに一度、警察の事情聴取を受けたが、交通事故に関するものだった。怪我は全部交通事故によ

るものになる。海彦と愛人は死んだ、爆発は六百三号室のガス管のひび割れによるガス洩れ事故と断定された。新材料のガス管が問題視されていた。六階以上が吹き飛んだ物凄い破壊力だったが、不思議なことに、どのガス栓も開いてはいなかったという。

イケイケは目を閉じていた。脳にある血腫を取り出す手術が成功した日、気持ちよさそうに涼しげな目をモヤモヤにとめた。

「ああ、そうだ、僕、調べたんだよ。それで時間をとってしまったんだ。でも、決行は二十五日午前零時。モヤモヤは勘違いしたんだ！」

「何のこと？ 林一家のことなら、わかっているわ」

「そんなことより聞きたくないか？ きみのことだよ！」

「わたしが、どんな魔女かってこと？」

イケイケが笑いだした。それがあまりにも幸福そうで、モヤモヤも釣り込まれてしまう。

「モモはね、残念ながら、魔女なんかじゃなかったよ！ きみのお父さんは一家心中を決意したのに、いざとなったら、どうしてもきみだけは殺せなかったんだ。天使のような気がしたと書いてあった。そこで手紙を持たせて、表に向かって、きみの肩を押し出したんだ。きみが燃え盛る火炎のなかから現れたとき、本当に物見高い見物人も天使だと思ったそうだ。確かに光輪が見えたという人もいたそうだ。だから、きみの取り越し苦労なんだよ。きみが殺したどんな事実も証拠も存在しない。モモ、

わかったか？ ぼくにはわかっていたけど、証明してやらないと、きみはわかろうとはしなかったから。警察にその走り書きの手紙が保管されていた。きみに返してあげてもいいそうだよ」

モヤモヤは何も見えなくなった、それだけではないんだから。引きとってくれた伯父さんだって、溺れようとしたわたしを助けて死んでいった。養母さんはわたしが殺したのだといって、わたしを施設に追いやったのだ。モヤモヤは回りの人を必ず殺す運命をもっているのだと。何千回何万回聞かされたか知れない。人の命を食ってしまうのだと……。だから安心して暮らせないと！

「伯父さんは心臓病の持病があつたんだ。それでもきみを助けたかつたんだよ。愛されていたんだ……」

イケイケは顔を輝かせている。モヤモヤの大好きなイケイケが戻ってきたのだ。

「でも、あなたまで殺そうとしたわ。これからだって……」

「きみは山彦も殺してはいなかったし、誰一人殺してはいないんだよ。僕がガス栓を締めたんだから。きみは誰一人殺してはいないよ。殺したのは僕だ！」

「いいえ、もう庇ってもらわなくてもいいの。わたしはあなたまで傷つけた魔女！」

「何か勘違いしているんだよ。あの男は山彦を自分の子供でないと思っていた、夫人は別居していながら、子供がいるからと離婚に応じなかったんだ。夫人は通訳としては優秀で、お産の休みもとれないほど忙しかった。出生届も夫にまかせていたんだよ。奴は自分の子供でないと思っただけで出さないでお

いて、死の三日前に漸く出した」

「相続上、有利なのね」

「当たり前！ 夫人の親と自分より、子供と自分で相続したほうがいい。そのことをきみに話そうと思っただけだが、いくら探してもいない。夜になつても帰つて来ない。さては、あそこだと考えたんだ。六百三号室のドアはロックしてなくて、開いたがガス臭がした。きみがやったなと思つたさ。ガスを外に出せば嗅ぎつけられるし、もつたない。一気にとも思つたが、あいつの生きている間に白状させない手もないと思つて、ガスの噴出口を探して閉じ、そのまま、ベランダに抜け出して戸をしめた。脚立があつたので、上の階のベランダに取り付いた。あいつをベッドから引き降り降ろして押えつけ、白状させようとしたんだ。上ではガス臭はなかったよ。だからそのことを忘れてしまった。男一人だと思つていたのに、隣りに女がいたんだ。野球のバッドより太い棒でなぐりかかってきた。僕は男を押えつけながら、棒を奪い取つた。女は後ろからむしやぶりつくし、男は暴れるし大変だったよ。僕は思い切つて前後を打ち据えた。いちころだよ。室内にあつた鍵で外からロックして非常階段から降りた。あの程度のガスで大爆発するものなんだね。いや、ガスは多すぎない方がよかつたのかもしれない。僕が中に入って空気を混合したのがよかつたのかな。建物が新しいから、気密に出来ていたんだろう。やつらは僕に打たれたのが致命傷だったよ。爆発事故はカバーしたに過ぎない。殺したのは僕だ！」

イケイクは陽気そうにベッドの中で、ラグビーのボールを小脇にはさんで、片目をつむってみせた。「嘘、わたしが一人でやったことよ！ 駄目よ、その為にやったのに……」
かれは両目をつむった。

「モモはこれ以上、つらい想いをする事はないよ。それでは神様の片手落ちだ！」

モヤモヤは気が遠くなりそうだった。とうとうイケイクに殺人まで犯させることになった？ いいえ、イケイクがそう想っていることが間違いだと覚らせなければならぬ。

モヤモヤは新聞を集めてきた。如何に大変な爆発力であったか。報道写真が何よりもよく物語っていた。死体には爆発による死因以外は認められていない。

ふたりは顔を見合わせた。

或る日わたしははっとして目が覚めた、電話が鳴っていた。性懲りもなく。

「モモさん？ 林和歌です。ショックと忙しさに紛れて、あの節のお礼を申し上げないでいてごめんなさい。本当に大変でしたの。漸く子供を引き取って久し振りの母子対面ですよ」電話の向こうで、赤ちゃんの弾けるような笑い声が、夫人の声と混じりあった。

「もう、お坐りが出来るんですよ。主人がこの子を自分の子供でないなんて申しまして、困りましたわ。なにしろ、血液型の検査結果が病院のミスで記載間違いになっていましたの。新しく検査をして

それが判明しました。主人はそれで、すっかり離れていってしまったんです。今ころあの世で、自分の間違いに気づいて、泡を食っていますでしょう……」

11

イケイケは奇跡的にラグビー部に復帰した。彼に絶望はない。

今季最期の決勝戦にまにあつたのだ。球場は開戦前から異様な興奮と熱気に包まれていた。モヤモヤは中段に席をとった。長かったような短かったような闘病生活。あそこからの離脱。

抜けるような青い空に鳩が放たれた。白い鳩はまるで何かを祝うように、何時までも球場の上を旋回し続けている。

ハーフライン中央に置かれたラグビーボール。キックオフ！！ 白に紺の縞のジャージーに煉瓦色のジャージーが挑む、夢にみたイケイケの戦線復帰。今それが現実のものとなって眼の前で繰り広げられている、モヤモヤは有頂天だ。ニヤード地点からのパス、タイムアウト。強烈なタックル、タイトスクラム、上半身が組み合い強靱な肢が押し合って回転する。抜けた！ 素早いパス、後ろに後ろ

にパスが渡る。白と紺のしましま、ボールを持っているのは彼。走る、走る。その速いこと！モヤモヤの心臓が叫ぶ。

「見て！ 見て！ 見て！ あれは彼です！ あの速さ、あれは、わたしの彼です！」
タクトルを右に左にかわし、弧を描いて走り、もう誰も追いつけない！
インゴール、余裕をもって、トライ！！

「凄いでしょ！ 速いでしょ！ 見ました！ あれは、わたしの彼です！」
このスピードと豪快さに、観衆の感嘆のどよめき。応援歌が一際大きくなった。

イケイケがモヤモヤに向かって、投げキッスをした。イケイケには何処にいてもモヤモヤが見えるのだ。

迷った白い鳩が一匹、モヤモヤの足元に舞い降りる。

さようなら！！ モヤモヤはもう、何も考えない。熱気と興奮で膨張した球場を背にして、独りで歩き出していた。

何かがしきりに記憶の喚起を促していたが、どんなことがあっても、もう想い出さない。彼を不幸には、できないもの。しかし、忘れてしまうことは狂気に似ている。

モヤモヤは独りで歩いていく。決して振り向かない。

球場の上の青い空を、鳩が一匹、何時までも何時までも旋回していた。

完